



增
流
印
第
五

增 5
508
5



45
508
卷5

云云一經神と一五



○金神十二神十二神等の名を修行次第に依りて陰陽家
乃の浮屠氏に依りて己の神と云ふ人々と或る

○妙觀察智阿彌陀 又曰紅波利色阿彌陀

○之身ノ印 彌陀 左半ハ法報兩身印右ハ應身印
當麻曼陀羅像是也

○如意輪 天道化生是則如意珠天上勝宝ト云ク

○私曰天道初日神と稱する者之を以て之を撮

○破見菩薩 北辰也蒙髮提銀路龜
蓋以云其作也

○摩伽迦羅大黒女 此外有比丘大黒王子迦羅大黒
夜叉大黒三面大黒

○赤童子 翼象配 兒屋年而謂春日明神

○圓滿具足藥叉鬼子母 胡語訶梨帝是鬼子母神也
梅十羅利名正法花與破法花異也

くして西の依道の時水樂城の子費をとり
世に子費を多財にふるふは、此列として
このころりりせり

○此の神社は神代地津の少神位に社を
むりてくくし、之川に河帳の少神位に社の上
那の神系無神流せり

○其後秀吉病革の時法候を命じて、其後秀吉
に背く一町の川を築き、むら田を築き、其後法
に於て修験者として、其後秀吉の死に
○此後法候の嗣は、其後秀吉の死に、其後

地を以て祀る事、神

人門^間万事不定。身似明星西亦東。三十一年

如一夢。醒求在內破序中。

此の兼急二年、死に、其後秀吉の死に、其後

○此の兼急の上の山は流るれり

○此の兼急の月も流るれり、其後秀吉の死に、其後

○此の兼急の月も流るれり

○此の兼急の月も流るれり、其後秀吉の死に、其後

○此の兼急より、其後秀吉の死に、其後

善溪川と號し少能くおつ 右尾列左名刺書

加北 古書故野尾列 馬田一宮 下付 皇律

今ハ流列 皇威 皇威と評して信を起し

新永橋 皇威 皇威と評して信を起し

右四衛 今もあり 皇威と評して信を起し

少路 皇威 皇威と評して信を起し

流連 皇威 皇威と評して信を起し

○ 今付 皇威 皇威と評して信を起し

○ 中流 皇威 皇威と評して信を起し

○ 水 皇威 皇威と評して信を起し

○ 平野 皇威 皇威と評して信を起し

○ 紀 皇威 皇威と評して信を起し

○ 谷 皇威 皇威と評して信を起し

○ 紀 皇威 皇威と評して信を起し

○ 那 皇威 皇威と評して信を起し

○ 丁 皇威 皇威と評して信を起し

○ 紀 皇威 皇威と評して信を起し

○ 孝 皇威 皇威と評して信を起し

○ 武 皇威 皇威と評して信を起し

○ 谷 皇威 皇威と評して信を起し

○ 塩 皇威 皇威と評して信を起し

○ 諸 皇威 皇威と評して信を起し

○ 麻 皇威 皇威と評して信を起し

○ 飯 皇威 皇威と評して信を起し

○ 宿 皇威 皇威と評して信を起し

○ 大 皇威 皇威と評して信を起し

○ 少 皇威 皇威と評して信を起し

○ 大 皇威 皇威と評して信を起し

位桓 武朝 古佐美 大納言 廣濱 肥後守 長江 式部大輔

魚弼 山城守 國守 典藥頭 杖範 彈正忠 長谷雄 号紀納言

濟光 冬後從三位 文利 紀伊守 忠道 紀伊守 家俊 紀伊守

宗信 彈正 宗雅 大藏大輔 定綱 宮内少輔 俊文 紀伊守

後重 紀伊守 宗遠 河波守 重滿 河波守 行義 左衛門督

行高 行一作之始 移任尾張國中島郡坂田村尾張守從五位上母今川貞也

正泰 坂田孫立郎 右衛門從五位下 奧國四年正月於四條與敵死一作之泰於尾列津島立祖神武内 祠俗所孫立郎殿

之盛 一作正盛 修理大友 正重 尾張守 宇津守 正綱 兵部大友 正純 兵部大友

正將 孫三郎 正綱 兵部大友 正純 兵部大友

女子 源良王室 良王宗良親王孫 尹良親王子

正道 加賀守 扇田備後守 信秀 正貞 孫右三門 法名道悅 子孫多矣

石上尾丸河津坊田氏系藩多 正泰之高 安富

細久湯上等 孫氏多

清原姓 平野系圖紋 一魚鱗 今三鱗形 秘紋目紋

業忠 舍人親三十三世 大外清原賴業十一代孫 少納言宗業ノ子 始名宣三位 主水頭宇津守 官方應永中 移尾列津嶋村 後子男宗賢入吉野 歷二年 歸洛仕朝 領尾丸中嶋郡 平野村

宗賢 正三位 贈從三位 般橋 伏原社 枝賢 平野 右京進 國賢 少納言 秀賢 升殿藏人 子孫仕朝庭

宗長 平野 主水正 實尾列 赤目城主 横井 越前守 平野時子 宣賢 從二位 濕翠草 實下 部兼 俱子

宗房 主水正 母坂田修理大友 正盛女

賢長 右京亮子孫 仕北條家 為駿列 善篤寺 城主 法名 万久武勇人也 子孫改神田 駿列 神田 修理亮等 是也

大衆のまゝにしてありしと又服の色織と高しきもの形に
めて着ると何いしとより按ずるより大衆の如く
して何いしと高し中暫しといし者同記織と服とありて度
し上流の如く制するに^{大衆}是より中より世よりしりて
誤り傳へて^{大衆}系法とせり

諸社神事勤行事

祭豊年不翁凶年不饑是礼典之所定也而近年神事
等或陵夷背古義或過差忘也貴神慮難測人有何益自今

以后恒例祭祀不致陵夷臨時礼尊勿令過差之矣
可修造本社事

有封社者任代々符少破之時且即修理若及大破言上子細者
隨其左右可有其沙汰之由被定置訖而近年社司恐貧神
領利潤無顧社壇之破壞匪嘗不恐神慮專可謂忘心乎
自今以後於背此制法革者可改補其職矣
此制入りてし可くも古也代々守りてしりて
友翁等遺化のり多し一盤田の友翁等又て知人し
○康正二年二月島山尾尾守政長將軍の命と有る政
才何より義就をといし河内より向い笠振り於て全職す

政長義就乳母の旗カケののりを制し始りは南方紀傳よりく

○厨をクリヤと刻せし庫もクリヤト刻す按するはクリヤト
云しクリヤのまはらうラヤノ切

○むかし太清ある雞を信せしは延慶を神宮傳或は雞幾
ぬ雞印哉丸と云ふ事く又くく

○瘧疾のぬいロー一斗前又太蘇根とす湯は柳と
ひる牙湯は湯すく落て雲平一又至の軍は馬は何と
考すは流はおりはあすくして何よりか一と云ふと也
下ふ西は蘇の根は白菊と入し可くく也

○文の比あり人代ありりもけりしは此らくくといゆし
章のやまうまうひて海はけりしは道かひの解

君去往他郷昔今臥病状訃音如落耳莫惜三炷香
こらんえちり客中に彼章を可ぬくまじくあひんよ
まーつすししけりしはまのや何れまじし也

○男子作過房事太多精気耗脱死於婦人身上者真偽不
可不察真則陽不裏偽者則痿

無冤録下に及くより吏たる者りるものと云ふ事
婦の爲り欺りて冤と解く事ありし

○當持州院家ハ右大臣藤頼宗と三宅鎮守府將軍基頼の子

主神社上載大神大物主下載卷向坐若御魂舊事紀
素戔嗚尊之食物於大御食都姬大倭本紀釋日本紀所用云御食
津神今卷向穴師社所坐據舊事紀又以素戔嗚尊御食肆
神祠一山西地彼一同郡穴師大兵三神社稔伐食神也
是亦意同上兵主神主八千矛神可以見是近江國野洲郡
兵主神今訛兵主云同曾村天皇也以素戔嗚尊稱牛頭天皇
於今士民所傳可亦證焉其播磨國飾磨郡射指兵主神
社二座今廣峯社在飾磨郡是彼諸記曰山城祇園社元
自廣峯所移也射指者素戔嗚尊子五十猛神子射指言
相涉醍一岐嶋壹岐郡住吉神社兵主神社舊事記云詔

素戔嗚尊者所知海原矣詔寄賜矣今列海神則兵主
神者素戔嗚尊也明矣是
右度會延修考也
○ 伊弉諾之曲ハ執事者守之の儀より始ル其名とす
○ 持弓と法事ハ獨々ハ委之る以テハありしと云ふ
○ 又ハ周の在りてハ帝王の姓と下ニありハたり
○ 乃チハハ漢高祖帝敬ニ列身と獨りしより有ル人ニ
○ 逆ニ法とありしと云ふ
○ 我祖五代哲也血とありて我押の上ニありハ異邦血と
○ 寸西の教と有りしと云ふ

不重經律戒に剥皮為刺血為墨ソレハ歎以テ之儀也
コト人ハ多ク佛書ニハカク事アリ一聖賢ノ如クモ又
我朝ノ故事ニハ之ノ儀ハ俗ニカケルハ浮屠ノ人
ヤリカク事アリ

○西域記ニ云在頸曰璽在身曰珞

○普陀山ハ唐大中間日本ノ信惠尊如ク觀音像トアリ明
嘉靖三十二年日本人焚毀ス清康熙中又紅毛人亦焚毀ス

○津逮秘書九曰梁武帝大同元年紀外間用九陌錢可通
用足陌大同後八十為一百名東錢七十為百名西錢京師九十
為百名長錢宋晉平王休祜以短錢百懸反唐昭宗末京師用錢每緡八十

○五河南府以八十為一百五代錢出入皆以八十為陌漢三司使王
章始令入者八十出者七十七謂之省陌

○今在味字ノ字係之ハ或ハ未將ト書未致計ノ謂
須梅宗孫穆雞林類事方言ニ云將者曰家祖ニカクノ儀
言味字ニ密記ノ書アリ俗高麗ノ言ノ司カク

○和俗弟般ト書藩トシト是又雞林類事ニ云和字曰漢カ字漢ヤン
和字曰善漢ト云韓ノ方ニ也漢字曰和ト云

○雙角五匹ノ靴ハ天子服御ノ彩紋アリ臣下ハ三匹ノ靴
今靴ト云テ一ニ匹ト云テ五匹靴ト云テ和ト云

○祈年ノ衣ト周礼ニカク禱ノ衣漢ト云祈年靴風ト云

の傍より少雲ハ其後樹その時印〜亡ぬその時其指
 入れり物と心々しく其色〜その内日海を載りて其
 秀云〜） 其先院へ賜所とあり
 ○尾尾連中と公家衣編之ハ其先年中二月十日賜之
 ○元禄十二年己卯九月二十日奥列仙臺千景万法と此境内
 之ノ昔系清衡秀衡々古推及ハ和泉と下ノ首と
 鳴也々皆楠板と浮ぬ〜） 形骸を海とて其
 也

○神衣祭ハ四月内乃秋云 荒念々其可 二日ありて申或人との
 一ノ神販部連神麻績連ハ之〜） 可とありて終

常任庵 等覺庵

五軒

文峯軒 取竜軒 万生軒 慈照軒

修領軒

十室

行室 岩室 学室 了室 傳室 蓮室 聞室

安室 溪室 紙室

執啓堂 四号集慶庵

室前六人 茶執事 小執事

自室前入室移軒轉庵外院戒尾西萱津横笛

前初世の者これ其年同十年六月五日二條と免す
 同八年八月命して入等初世の海を許し
 是は後世に傳ふよりあつてなり
 西府又四衛と稱す世後云を代母滑解途の之衛即
 ちし公報也
 ○愛知氏 尾法 浮取謂の才也若凡信とすて八條人
 高信長今程卿ととそりす略奥良の采因に死流法也
 了れ海島の尾海因と云者の似せし尾法也也初初別
 或名と文とより從古位も信も義成也也初初別
 して初と姓ととすあ初初司慶能程師、也と書

一、右の少尉能如信豪能
 〇道津氏 尾法 七波治者身海取貞の孫池田刑部
 初世の子尾系を文取益
 常村等とて教軍功あり後尾尾尾尾尾尾尾
 〇警津村 尾法 益取益の才河物也也尾尾尾尾尾
 〇官職 秘抄二卷 從二位 兵部卿 平親撰

土御門院正治二年撰せり

職原抄二卷一品准三后源親房所述

奥書ノ章執後ノ喜深幅の

律と庚辰より親房刺後の後十有年ありは

後村と院奥國二年より十有年ありは始れハ抄の

中編より了りし中百四十年ありは職原と

講する人細抄と云ふは又職原ハ今ハぬりし

所にてそ職原ハ延喜式より凡百箇の

初より終せは先津合格式と云ふは又職

細抄と云ふは親房よりつれハ可と考へし

よて未疏をよみて校書と云ハ職原ハ終つてそハ
抄と抄の可なり

。麻又サト刻せり。麻をサト後ハあまの上巻也又ノ

言ハぬ予曰又集ノ後麻と云なり又キアサト云

中後能方凡ハ此抄取ア百枚異々ありしハ刻ハ

一又キアサトハ撰ぬりしハ後凡

。下巻二頁の未度會延經神ノ事ハ凡ゆるしハ云云

左物源章和ノ事ハ神記の事ハ凡ゆるしハ云云

ニと云ふ事

中流川上をいすりしハ刻す是ハ四ノ事ハ強し

の事と仰ぐなり

○三代實錄貞觀十五年十二月阿閉臣雄健等賜姓朝臣
其光火産余ノ之後也

梅河同氏と云聲余の後と云ハ字誤之ハ聲
と云聲子也

○旧事記建簡草余簡と簡ゆく一此氏源建簡草
余之誤後國之使令交社也カヤトカナ核表也此

○此氏源之上毛野祖伝之雄畧御世也賀君男百尊
為阿母白智家祀而帰

○天字と云く又字と入也

○又吉彌復部 復ハ候字ノ誤也續日本記
君子部ト云

○又神名是ナリ

為志神社

和名忍海郡是飯石

伊刀麻

飯豊

生狹

御食津

御饌都

飯石

伊毘志

鳥志名ノ中ノ名是ナリ

○又曰一神之名受豊字氣豊之饌字賀乃賣等

○又曰一神之名是ナリ

○毛受是御名是ナリ

らりり

○好事不出門惡事行千里

北夢瑣言云六人んり
晋相和疑カ銘ナリ

○菩提水 冒子清汗ハ 僧聰紅蓮と云也と托して自死の時

許文孫同所接菩提水渡向紅蓮一葉中と云い

山名塚拾遺云又云又由と般若湯と謂し年秋

氏今更あふんくう嗚呼浮屠氏也犯飲由と書し又

菩提般若の文と云し不律過行し傳てん

○伽羅 初黒陀羅尼集經云伽羅樹華嚴經云黒沉香

空藏云堅黒沈水 今清人寄梅と名づく

○天台止觀七云如野至唯解一術方故一人獲一哺科何

續字神農本州

倭俗字子の字とやぶるすーと云ハりし名取

○異邦折字と云し其の字と云し之陽桂堂職塚

花例同海多と云し我も取押と相しと云い

桐字と云し記と云し

○勢田を津多の月也信所祝詞

掛毛畏幾

皇御神乃純徳於奉仰留

年号支于其五月四日

明昭幾珍乃廣前 仁頭人姓名定氏獻流白妙乃足幣帛

於捧元稱辭竟奉流 苜酒者脹服 滿並綠糝者八束穗乃
如高知利雜物置足志服 供奉留皇御神乃仁矣御心仁
平炒安炒所聞氏

國中廣々豊仁 境内長ク富美 凡服水旱風蝗乃變
無幾

手長乃蔽御也止 堅般石仁常盤仁 牙利幸信給止倍

官位尾張宿祢某 恐礼恐礼申須

契田太神宮神幸祝詞再拜

年号支子五月五日 八月八日 撰毛賢幾

正一位勲一等契田座白王太神止 稱辭竟奉留大化仁神

德字顯天志神留座志 朱鳥仁

靈威字示天志長鎮座須 自此以降每年鳳輦於莊利奉天

鎮皇門上仁

神幸於成奉流御供奉仕流者波大宮司於始有

司乃祠官所司内人舞人信從殊天卿輔頭人於

朝使不准信諸氏乃神人

御太刀御弓等於捧並宮子元部等十連乃走馬

奉立駮仙躡

神座於閣上仁逸志奉天封戸礼代乃宇津乃御幣於

大内人乃太玉事仁取垂今歲青官位尾張宿祢某

恭久天津祝詞乃大祝辭於祢中

聖帝万壽宝位無動久文武百官景福永久昌仁

海内咸久

玄德仁服志千歲乃之不續於傳武總天天下乃蒼生

凡人常仁和樂志其氣於得天其家於保多武

足御世乃茂御世止常盤仁監盤仁護理恆美

給止恐美恐疑申事於平夕安夕大宮同

聞食止申

讀畢兩段再拜

八月神幸祝詞同但改鎮皇門上四字為海藏門外

四字又改閣上為大福田祠

神幸還座祝詞西段再拜

惟

年号歲次支干阜月初五

享子祝既治天志

還幸成奉留於此土盤大饌食八甕大醞酒於備供奉利

廣前歌舞簫管於奏天傳謹天

宇圖乃幣帛於捧事壽志傳

奧津御世乃礼典永萬代仁傳信

天津御惠乃景福常仁及止聖武

官位尾張宿祢 某

天津汝能吉詞於奏志奉留事乃由於恐礼美恐礼美
聞食止申頌

○德川家幕下十六將 別記之

酒井左衛門忠次

慶長元年十月二十八日卒

大久保七郎右門忠世

文祿三年九月卒

大久保治右門忠佐

慶長十八年卒

渡辺忠右門守綱

元和六年四月九日卒

柳原式部太輔康政

慶長十年九月十四日卒

内藤四郎左門正成

慶長七年四月十三日卒

蜂屋半之丞貞次

永祿七年五月戰死

平岩主計頭親吉

慶長十六年十二月晦日卒

本多中務少輔忠勝

慶長十五年十月卒

井伊兵部少輔直政

慶長七年二月卒

鳥居彦右門元忠

慶長五年八月卒

松平甚太郎康忠

高木主水正清秀

慶長十五年七月十三日卒

鳥居四郎右門直忠

服部半藏

米津勝藏

○ 源氏物語人名凡四百二十七人悉富言也紫式部所著
書に於て妖嬈の初と巧とせしむる定弘の神と神と
藤原の末と慶長より一也河海の序と尺と

源氏八千 源光行授

行成本 今不傳 二條本 伊房 冷泉本 中納言 朝降

黄祿紙 堀川氏 臣後房 京極本 從三位 藤子 唐紙小翠子 弓尚侍 本

法皇寺 殿本 五條本 俊成 卿 青裱紙 定家 卿

以卯の河内中とつりあり河内源光り八千と授合
一自は捨一影りとせられし也

和泉国大鳥郡 万代宮六社 功皇后廟也 神祇宝典万代百右鳥也

又書 同国大鳥郡 社 子孫子命あり

ト家の源子と多社ハ天照大神御孫と云ふ河内曰

これト源兼照、孫あり一高純ハリハ武尊と

せし姓氏源ナレ和泉郡列古千代の中大鳥連ハ

天兒屋余の後あり一尺と云ふ 子孫子命ハ

皇屋余の神孫大鳥氏の神あり 皇典の神を

多とつり一但る多郡と云ふと云す、社あり

あり 社名式曰

大鳥郡

大鳥神社 名神大月 改新嘗 大鳥神社 歟

多日又差使入江矣

心官領事山殿

長母寺以將野原内田代陰所弘原案寺江高志
川寺家以寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺寺

應永二年十月十日

沙海之判

高寺江持

○水野江少河江野改帝永純

將軍家改所下尾原寺英比卿内少河村一糸江人可
令平源永純法師若若為比乃職事
右江親父向少神寺永純法師若若永貴

去年八月十日讓出為波御寺之例之於沙江之柳
作少作

文永二年二月十日

令江島少尉友系

別高人系持令文平源氏

上判

相模寺平源氏

石島少門下 equal 源雅

將軍家改所下

可令平源永純知尾原國英比卿少河村

合寺分
源之

比江御事

右記之文、此後高祖純法所、法為以安元年二月

五日、讓水或曰為改、御手之圖、或曰河津水、或曰河津

以安七年十月、

東至菅野

合、以河、切、御、手、

之、列

別、高、隆、興、三、年、

之、列

乃、三、校、三、年、

之、列

出、統、退、所、中、河、勢、在、河、津、軍、主、西、宮、寺、之、所、也

之、後、最、心、能、所、發、向、海、在、河、津、切、者、河、津、令、地、當、水

也、

歡、喜、二、年、

河、津、少、路、及、河、津、

少、河、下、水、又、原、高、之

去、月、廿、日、今、跡、の、後、河、長、引、也、條、最、端、也、河、可

抑、也、幸、也、水、也、

歡、喜、二、年、

河、津、

少、河、下、水、又、原、高、之

○真臘風土記曰、亦有宮觀、之所、皆無別像、但止二塊石

如中國社壇中之石耳、

本朝神社名と之、者、有、之、也、之、也、

○又曰、城門金橋、金獅子、二枚、列於橋之左右、

是、又、吾、社、之、御、也、之、也、

又曰又有佛像用魚肉

初尾由日麻加法安樂寺河内尾尾之町魚肉
と河内すゝも似し河内舞の町の尾と本日麻加神社
の時の後後と初立してるといふ改子と氏古
凡を耳一物後真臘の法とて改子とす
ソウレ

△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]
△[○] ㄱ[○] ㄷ[○] ㄹ[○] ㅁ[○] ㅂ[○] ㅅ[○] ㅈ[○] ㅊ[○] ㅋ[○] ㆁ[○]

海島法回記未載し有大同小異

○ 己卯二月十日 獲回記の法行、その一も新業舎此法
よして法回記の法行、その一も新業舎此法
樂人長そよ子を奏して尾尾氏等法樂とす
又次舎と法回記のよる多けて鳥を儀ももはる
今、のこまを叫ぶ事あり、俗に云ふ、凡し我輩法樂
とて鳴きるといふ、我列中法の高二月のありて
鳥を鳴らすあり、海島部法行社にてその日法を
鳥を鳴らすあり、
○ 鷲の法行と法行て其の法行とてあらし、と神布

右ノ向巽位



見万宝大全射學子殺率 乙卯射者ノ儀アリ

川

雀字也

鳥雀篆見搜羅土車合并萬 錦不取人十一態形年五鳥形是歟

射家有鳴弦ノ黒札書甲弓因鬼朋王等之字甚不經之事也

曆代小史一百四炎徽紀問之標人歳首別以土孟十二貯水

隨辰位布而禱季終夕集衆往觀若寅有水而卯涸則知正月而二月早云々

紀劬徳野坐神社名神

称本宮

第一中央本宮伊弉並尊 第二二ノ官速玉ノ男ノ神在本宮右

第三三宮事解男ノ神二宮三宮同棟而異ノ二三之間別設神

第四若宮大日灵尊所謂若王子 中四宮天神七代而四所相殿

下四宮地神七代而亦有相殿配享之傳

右凡向巽位四圍廻廊 一百八十間

速玉為諸尊一神之子事 解為並尊一神之子是能野傳
有馬村花名屋 是神代神迹若日本記所說

玉置山荒祭神社 火ノ神ト云々 自岩屋 遷祭之地也

神藏祠 是地主神高倉下倉也以穗屋殿倉為相殿 高倉下天香諸山年刊稱

徐福塚 在飛鳥村自本宮九里八町

○神社并垣ハ井の字為子あり申事此宇摩志摩治年

○敏天瑞家の壁榭楯以齊亦立今木土榭刺鏡於布都主奴太神

○宗齊殿内とくしうしうまハ今家の垣ありて中垣より直野時細

○西月万羽より素袍馬帽よりして法河を過りて尾長

○本宮高長母寺宗山平河と河と化して口玉ありて

○平内付の由よりしるす物やそとははハ倉倉宮造のと

○たうそまよりや羽延りよりありあなりの千鳥万鳥と

○所始の次よりこれと傳ふ事ハ流例あり

○新羅謂城為侵牟羅 唐書

○梅侵牟羅ハ蓋倭語城と謂て斯呂とす

○新羅好祠ハ神 司

○梅吾邦處ハ山神と祠ハ新羅の俗より

○山崎敬義曰日本云比濃茂騰有大有要貴号之訓傳見之

○會筆録梅比濃茂騰ハ比濃美奉騰の轉訓也

○比濃ハ比留禾之畧訓也

孝養井入の事

4年より新法論の事と終ひて其の事
凡人の事誠よりして其の事と見ゆ
と年毎に其の事と見ゆ

○道に酒を飲ばず
代巻有少彦名鶴鶴羽衣之事又仁徳天皇御請号大鶴鶴尊故号
とす

○人より少彦名を命とて其の事と見ゆ
醫者と記す事少彦名の中を以て其の事と見ゆ
其の事と見ゆ

○人より少彦名を命とて其の事と見ゆ
○山神とて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ

○隋煬帝ヤウタイとて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ
○高彦彦とて其の事と見ゆ

此の又也名も軍地記と云物も亦信地と信明と記すはく物も
神のちもと人すこれハ神也と云は河内也其れハその也と云は
軻過冥和神と云は者多し物れも四曲と考れハその也と云は
抄す日此名武丹波國菟野阿多古神社に傳りて其の河内也云若宮之虎西屋非

○通弦乳

俗云ト、ソ、
登峯文集有

○尾刈葉栗郡光朋寺村遍照山光朋寺天武天皇白鳳六丁七年創建本願之中
葉栗臣人磨也

○大内教幸の子任世僧と云く多門院と云く一坊列す物屋は四曲也
幼幼心之存まあり所よりてそを寺と云く聖帝と云つくと山民の
始りし山只周坊あり軍の必之也聖帝也の也と云れり今其の寺を聖政

高よすく聖政の子年改ハ早海よ生れ聖政の時より織田信長に傳
りし大内氏ハ首領を有す才あり子孫傳りしハ一推古帝十九年又
授記して周坊四依波於鞠也傳多し其後ハ留り居れりそを聖正聖
之良祖也の也と稱りて其の也也満也始りて大内氏と云く一也
山の也の碑ありん也

○百濟國聘使來居嶋鹽館投書於大學寮曹司問其王仁所齊
來論語矣大章博士菅原道文及吏部郎中大江音網等復書
答之略曰夫貴國王仁以本朝應神帝十六年乙巳來乃晉司馬
火太康六年也其所持到論語為白文故為魚齊古歌末可考
要然西漢張島始合魚齊東漢鄭玄考合三論為定本則此本乎

其注解孔安國馬融鄭玄等所作乎如何氏集解則成於曹魏時
晉距魏甚近則其未及行於外國乎漢儒訓詁已久則必行於
外國然豈白文而已哉如文字不同則傳寫之誤習受之異擇之
而可也所謂卒為五十并有仁之仁當作人一章有函子曰字之
類傳寫之誤也葉美凡作葉美以作而樂之下有道字之類習受
之異也足下思之王仁本者藏在官庫乎雖吾輩不容管見故
不能應足下之求云

○ 雄略帝の時魏文帝の高辰貴といふ人投じし書、これ
弘明傳子の如く弘仁帝の時百濟の何如といふ書に
ありし記より云々

